Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.5*, pp.55-67, 2012
信州大学教育学部研究論集　第５号　pp.55-67　2012年

〈学術論文〉

虚構理論から考える一人称小説と随筆の偏差

―中学校国語教材をめぐって―

山本亮介　信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：文学教材，虚構言語行為，作者／語り手

１．はじめに

現行の中学校国語教科書に採録されている小説作品は，いわゆる一人称形式の表現形態をとることが多い。その理由や是非はともかく，現状において，授業者が一人称の小説教材に諸種の対応を求められているのは間違いない。また，中学校段階に生じているこの偏重は，教育活動で文学作品を扱う者が押さえておきたい事柄であろう。日本の教育環境に置かれた子どもは，一人称語りのイニシエーションを経て，何らかの文学イメージを醸成している面があるのだ。その意味でも，ナラトロジー等の分析理論を導入した授業方法の練成は，たいへん意義あるものと考える。

ところで，中学校国語教科書には，諸種の近現代随筆（随想）作品が採録されている。ときにジャンル名を付して掲載されるそれら作品群には，固有の教育目的，教材解釈が設定されていよう。基本線となるのは，随筆が特定の表現形式をもたないことを前提に，作品をとおして筆者の自由な感性とその世界観に触れることをねらいとするものである（橋浦1991，浮橋1991）。またそこから，学習者における既成概念からの解放や豊かな感受性の涵養も期待されている（高野2001）。

そこで，授業者には随筆作品への構えも必要となるわけだが，あらゆるジャンル規定がそうであるように，随筆なるものの定義，形態には曖昧さがつきまとう[1]。大田（2001）は，随筆教材を「文学的文章といっても，物語や小説のように虚構をもとに作品世界が構築されていないために，学習者にとっては，親しみをもって，身近なものとして味わうことができる」と評価する一方，「表現形式が自由ということで，幅広い領域を含み込み，他の文章ジャンルとの区別がつきにくいという指導者側の問題もある」と指摘する。とりわけ，過去の体験エピソードを語る随筆（体験回想型随筆としておく）は，一人称小説（回想体が基本形態となる）と，明確に区別できないこともしばしばである（よく言われるように，逆もまた同様である）[2]。ちなみにこの点は，近代文学研究の領域でも，個別作家研究やジャンル形成論以外の場において，理論的に追求されることがあまりなかった。教科書中の漠たる〈文学〉イメージとともに，中学生たちは，この二つの下位区分ジャンルと向き合うことになっている。

一般的に，両者を差異化するのは，語られた内容に含まれる虚構性（の程度）である。た

だし言うまでもなく，リアリズム小説における指示対象(存在・事象)の虚構性(非実在性)について，テクストの情報だけでは確定できないケースが多々生じる。それゆえ特に，一人称リアリズム小説の多くは，体験回想型随筆との境界領域へ引き入れられることになる。2006年度版の教科書から数例を挙げれば，立原えりか「アイスキャンデー売り」(三省堂『現代の国語１』)・内海隆一郎「小さな手袋」(同『現代の国語２』)・辻仁成「そこに僕はいた」(東京書籍『新しい国語１』)・椎名誠「ふろ場の散髪―続岳物語」(学校図書『中学校国語１』)・安岡章太郎「サーカスの馬」(同『中学校国語２』)などは，作中の言語表象について，現実世界に存在しないものと簡単には言い切れないだろう。一方，随筆とカテゴライズされた作品表現の虚構性を考えるには，ある程度意識的な態度が必要となる。ひとまずここでは，ジャンル表記がなければ小説とみなされてもおかしくないテクストとして，夏目漱石「永日小品」中の「蛇」(教育出版『伝え合う言葉　中学国語２』)を挙げておく。

文学理論上の争点に即して両ジャンルの区分条件を考えると，テクストに現われる一人称存在の虚実，すなわち現実世界の作者と，作中人物・語り手の関係(同一性／非同一性)がポイントとなる。予想されるように，この区別も一筋縄ではいかない。理論的な境界領域をも構成する一人称小説と(体験回想型)随筆が，中学校国語教科書に肩を並べて存在している。ここに生じるであろう混乱には，しかし極めて本質的な問題が含まれている。本稿では，虚構理論の観点から，両ジャンルの曖昧さが有する問題射程を確認し，それらを教材とする言語活動の位置づけを試みる。なお具体的な作品として，現在複数の同一教科書に掲載されている，井上ひさし「握手」(光村図書出版『国語３』，学校図書『中学校国語３』)と向田邦子「字のないはがき(葉書)」(光村図書出版『国語２』，学校図書『中学校国語１』)を取り上げる。

２．虚構理論の展開

2.1.　近代小説と虚構性

フィクションの訳語としての虚構概念は，美学的事象の性質としてはもちろんのこと，日常世界の諸観念・事象にも適用可能である。とはいえ，虚構をめぐる近代の考察は，言語芸術としての文学，特に小説ジャンルを中心として展開してきた。このとき文学的虚構の意味するところは，小説の言語表象が現実世界に直接の対応物を持たず，それゆえ同時に非現実のテクスト世界を構築している，というほどに捉えておくことができる。ただし虚構性が，文学作品の成立に関わる一要素としてあるのは言うまでもない。

近代のリアリズム小説の多くは，明白な虚構存在・事象を含まないため，その虚構性の考察は，日常の言語表現・使用に照らした際の異質性を焦点とすることになる。ハンブルガー(1986：pp. 50-104)の分析などが示すように，そこでは，小説における過去時制・表現の特殊性が争点となるほか，登場人物の心中表現のあり方，会話表現の長さなど，虚構性を示すさまざまな指標の存在が挙げられる(野口1980：pp. 22-40，三谷1996：pp. 13-25，大浦1996：pp. 259-260)。ただむろん，事例外の表現がさまざまに想定できてしまうことから，

虚構指標論は決定的なものを見いだすには至らない。また，日常の言語使用と虚構表現の二分法を前提とする以上，本質主義的な理論として条件的に扱われることになる。とはいえ，テクスト上の虚構指標については，従来から語り(手)の位相との相関において分析されており，虚構をめぐる物語行為の議論と共通する側面があった。また読者側の解釈行為に必須の観点となることも予想されるゆえ，虚構理論の拡張面でその有効性を慎重に捉えなおしていく必要がある(清塚2009:p. 48)。

2.2. 虚構言語行為

言語哲学では虚構対象の指示表現が課題となってきたが，それは語用論的観点による虚構言説の分析へと展開する。語用論の立場においては，表現上の指標の有無といった実体論は退けられ，虚構言説を発する言語行為のあり方が分析される。サール(2006:pp. 107-108)は，虚構言説の創出行為を通常の発語行為の擬装と位置づける。日常の言語使用に備わる行為遂行性を顕在化させた言語行為論は，特に虚構的な発言を扱う局面で(オースティン1978:pp. 37-38)，言語使用における正常／非正常の二分法や主体概念の目的論的先験性を批判されることになった(デリダ2002:pp. 33-47)。虚構言語行為の擬装説もまた，「著者の発語内行為意図」を虚構言説の成立要件とするなど(サール2006:p. 107)，批判的検討の余地も多い理論となっている。

ところで，言説や概念の虚構性は，日常の言語生活やイメージ形成，さらには自然科学などでも指摘可能である。言語論的転回以後，現実／虚構の二分法がさまざまな形で問い直されたことから，(虚構作品を含む)世界を制作された諸「ヴァージョン」のひとつとみなす相対主義(グッドマン2008)，あらゆる言語活動の根底に虚構性を据える「根元的虚構論」(中村1994:pp. 114-125)，可能世界意味論の観点から虚構に関する「メイクビリーブ」の根源性を検証した「虚構実在論」(三浦1995:pp. 313-331)など，ラディカルな虚構観が提起されるに至っている。

虚構言語行為の擬装説は，フィクション規約の存在と作者‐読者間での了解といったコミュニケーション的観点を含んでいたこともあり(サール2006:p. 109, 120)，現在の理論地平で再考が続いている(清塚2009:pp. 119-129)。形式面に限っても，読者側の問題と接合しながら，より精緻な図式で提示しなおされている(ライアン2006:pp. 111-140)。それは原理論としての決定性は持たぬまでも，虚構指標論と同様，虚構をめぐる二次言説(教室でなされる作品解釈の表明など)において，論拠の一端をなす可能性があるものと思われる。

2.3. 読者の位置

美学・文芸学において受容理論が展開するなか，虚構表現をめぐる分析の帰結もまた，言説受容の問題へと帰着する。発語行為主体(作者／語り手)とのコミュニケーションを想定する場合もそうでない場合も，虚構言説の生成を読者側のフレーム選択の結果と捉えることが可能である(中村1994:pp. 128-130)。この見方によれば，テクストの虚構性を支えるのは，ジャンル慣習などを基盤とする受容契約ということになる。さらに，受け手側の「ごっこ遊び」的想像力を軸とする虚構理論も示され，一定の支持を得ている(清塚

2009:pp. 148-156)。加えて，読者の作品解釈へ語用論的に働きかける「パラテクスト」(作品本文にともなう諸々の情報)の存在も(ジュネット2001:pp. 18-22)，虚構受容の問題に入ってくる。そこでは，「パラテクストの主たる賭金は(…)，作者の意図に合致する運命をテクストに保証すること」(ジュネット2001:p. 458)というように，いったんは後退した作者の意図なる要素も再浮上してこよう。

虚構言説をめぐる議論において，受容の側面が重要となるのは明らかである。ただし，虚構性の選択・決定主体として読者存在を過度に実体化しては，議論の後戻りとなってしまう。逆に，ジャンル規約のもとでの自動化は，当の慣習を同定する際の裁断性も含め，虚構言説と人間存在のダイナミックな関係を捉えるものとはならない(コンパニョン2007:pp. 182-185)。そもそも受容論には，「現実の読書は理論の対象となりえるか」といった「恐るべき問い」(コンパニョン2007:p. 174)さえ付きまとう。それゆえ，テクスト-読者の相互作用論の立場から，読者存在が(テクスト内外における)機能的概念としてモデル化され(イーザー2005:pp. 58-66，エーコ2011:pp. 80-93)，さらにそうした読者とテクストとの極めて複雑な「共同作業」が描き出される(エーコ2011:p. 113, pp. 288-340)。現時点ではまず，テクストの虚構性と読書行為との曖昧な関係をそのまま把握することが求められているように思う。

3．一人称小説と随筆の偏差

3.1. 一人称小説の問題性

「何を」から「いかに」へと分析軸をシフトさせた文学理論に，いわゆるナラトロジーの観点があらわれる。小説世界がディスクールとして捉えなおされるなか，虚構性の考察もまた，析出された「語り手」のレベルに移る。このとき，小説言説の虚構度は，表象ないし想定された語り手と，現実世界の作者との同一・非同一をもって測られることになる(田口1996:p. 77，清塚2009)。

小説世界の語り手の位置づけについては，各種の作品形態に即したさまざまな見解がある。ここではひとまず，三人称で語られる小説，および一人称だが語り手は直接の登場人物とならない小説(異質物語世界の物語言説，ジュネット1985:pp. 287-288)については，虚構の語り手＝発話位置が比較的想定しやすいものとしておく。他方，一人称の語り手が物語内容の一部をなしている小説(等質物語世界の物語言説，ジュネット1985:pp. 287-288)では，テクスト世界内の言表主体，物語言説の言表(行為)主体，および現実世界の作者(言表行為の主体)の同一視が妨げられないこともある。そこで，一人称小説を真正のフィクションから区別する見解も生じる(ハンブルガー1986:pp. 242-265，三谷1996:pp. 26-27)。一方，安藤(2008)は，一人称表現が機構化する歴史を概観し，「「一人称」という問題設定は(…)書き手の「自己」に安易に重ねられる傾向」もあるが，実際には「自ら虚構であることを読み手に騙るための手だてとしてあった」とする。つまるところ，一人称小説は虚構理論の試金石となっており，たとえば虚構言語行為論(擬装説)の適否に関する議論(大浦

1996:pp. 258-261)，虚構(可能)世界について読者が事実解釈をおこなう際の条件論(「最小離脱法則」)(ライアン2006:pp. 108-109)，構築主義的な私小説論が指摘するテクスト - 慣習の相互作用論などが，その考察に深く関係してくる。

3.2.　一人称言説としての随筆

近代随筆をめぐるジャンル論については，歴史的観点からの言及は散見されるものの，本格的に取り上げられることは少ない。多様な叙述内容に適用できる緩やかなカテゴリーと言えるが，文学ジャンルにおける代表的な非虚構言説として，理論上重要な位置にあると考えられる。

内容面での定義が難しい随筆ジャンルだが，言説形態としては，言表(行為)主体と現実の作者の一致を基本条件にするものと言える。一般的な想定として，随筆とは日常の言語活動と地続きな言説であり，たとえばそこに語り手の介在する余地はない。ただし，言語論的転回後の射程では，そうした自明性を問いなおす議論も可能となる。井上(2008)は，随筆作品を念頭に，「一人称の語り形式の文学を読むとき，わたくしたちは，なぜその語り手に，特定の意識を持ち，あるいは自由な意志によっている，単独の主体というとらえ方ができるのだろう。(…)わたくしたち読者の目の前にあるのは，しょせん文字列や文章の連なりにしかすぎない。」と問う。つまり，随筆テクスト上の言表主体を，現実世界の作者と直結する機構に懐疑が生じるのだ。これは，私小説形態に関する構築主義的考察や，虚構理論における一人称言説問題などの必然的反転と言える。

ここで参考となるのが，「自伝」ジャンルに関する議論である。ルジュンヌは，「自伝(そしてもっと一般的に言えば，私的な文学)が存在するためには，作者，語り手，登場人物の同一性がなければならない。」(ルジュンヌ1993:p. 18，傍点本文)とし，そうした「同一性」の形成をめぐる考察から，自伝を「著述のタイプであるのと同程度に読解様式であり，歴史的に変化する契約的効果」(ルジュンヌ1993:p. 56，傍点本文)としている。つまり，小説の虚構性定義が読者との有契性に帰結したのと同様，あるテクストが現実の作者による自伝として成立するためには，諸種の条件にもとづく読書契約が必要とされる[3]。そこでは，自伝にまつわるジャンル慣習やパラテクストの存在も考慮されよう(ルジュンヌ1993:pp. 55-56，ジュネット2001:p. 54)。一人称小説と随筆作品の境界領域の曖昧さは，虚構規定の問題だけでなく，文学言説における現実性形成の観点からも捉え返すことができる。

3.3.　一人称(回想体)言説における物語性

テクストの虚構性に隣接し，重ねて捉えられることも多い概念に〈物語性〉がある。虚構性の考察が作品内容・言説形式の双方に関わるのと同じく，物語性もプロット(筋)の内容・形態両面から分析される。ところで，回想体を主とする一人称言説では，物語性の要素は何らかの形で導入されていると言ってよい。テクストを劇化する物語技法の使用をもって，語られた内容に虚構性を想定する見方もありえよう。他方，たとえば認知言語学が提起した言語的生におけるレトリックの根源性から，歴史や経験の記述におけるプロット

化(「物語行為」)の必然性まで(野家2005:pp. 16-124),言語存在としての人間と物語性を不即不離の関係とする議論が展開してきた。現実/虚構,日常/非日常の二分法を維持するか否かに関わらず,私たちの言説は物語性抜きに成立しない。「物語的自己同一性」(リクール2004:pp. 445-453)においてある人間存在は,いつでも「虚構的物語言説」・「事実的物語言説」(ジュネット2004:pp. 55-75)のなかに生きている。

一人称(回想体)言説においては,テクスト内外にある諸種の指標や文学慣習などの組み合わせから,たとえば小説と随筆のジャンル的偏差が生じることになる。そして,一人称テクストの物語性に接する際,作者・語り手・作中人物の関係を軸とする現実/虚構の想定は,必ずしもつねに二者択一の契約となっているわけでなく,むしろ極めてファジーに機能しているものと思われる[4]。時間の観点から敷衍すれば,物語内容(過去の出来事)と物語言説(現在の語り)の曖昧で矛盾に満ちた関係・接合が,逆説的にもテクストの強度を構成していると言える(遠藤1996:pp. 273-279)。たとえば芸術作品としての美的効果や自立性・普遍性の度合いを高めるために,あるいは発語内的行為ないし情報伝達の側面を際立たせるために,言説の虚構性と現実性は,送り手側・受け手側の双方で使い分けられたり,混同されたりする。こうした虚実の曖昧さと物語行為・受容の結びつきは,近代の文学言説一般に通じることでもあろう。

4. 境界領域にある文学教材

4.1. 「握手」

一人称で語られる「握手」は,作中人物である語り手「私」の現在に関する情報が少ないテクストである。ジャンル規約等の作用をひとまず脇へ置けば,語り手・作中人物を,現実世界の作者と同一視することも,あるいはそうしないことも可能と言える。物語内容の現実性をどれだけ意識(重視)するかは読者次第となるが,たとえば織田(2001a:p. 96)は,「握手」における感動の要因を「〈実話仕立て〉」であることに見ている。また各教科書の指導書は,作者が作中と同一名称の施設に一時身を寄せた事実や,そこでの生活に関する井上の回想を,参考情報として掲げている(光村図書出版2006:pp. 53-55など)。こうした情報は,文庫版『ナイン』(井上1990:pp. 203-204)の巻末に付された自筆年譜にも記されていた。一般読者や教室の学習者が,そうした資料に触れた際,現実の作者とテクストの「私」を同一視し,またその一帰結として物語内容を現実世界の事実とみなすのは,ことさら不合理とも言えない。「〈実話仕立て〉」のテクスト戦略やパラテクストの強度によって,小説が事実的物語言説と認知(誤認?)されるに至ったのであり,こうした読書のあり方は理論・現実の両面から支えられる。

「握手」が収録された短編集『ナイン』中の「春休み」では,「収容されていた養護施設」から弟と家出をした経験が語られている(井上1990:p. 156)。この観点からも,「握手」を作者の「自伝的作品」(青嶋2001:p. 125)として把握する読み方が促されよう[5]。なお織田(2001b:pp. 126-127)は,学習者たちが「ルロイ修道士」のモデルへ強い関心を抱く様子に

触れながら，「実話」として読む者が作品内容の虚構性を説明された場合，「せっかくの感動を壊された思いがする」と推測している。やや乱暴に言うと，「握手」を登場人物に変名が当てられた随筆とみなすのも可能であり，理論上それを強く否定することはできないのだ。とりわけ，作品世界の虚構性を十分踏まえてなお，作者井上の体験や思いに解釈をおとし込めるのであれば(織田2001a:p. 109，青嶋2001:p. 125)，小説と随筆のジャンル偏差はかなりの程度縮まっているはずだ。そうすると今度は，漠たる「随筆」イメージも含めて，私たちの通念と相容れなくなるわけだが……。

ただし，そもそも短編集『ナイン』は，作者と語り手の緩やかな同一性の装いと，虚とも実ともつかない出来事とが両立する作品世界に，独特のユーモアとペーソスが印象づけられる連作集であった(その点，やや異色の「握手」が末尾に配されているのは意味深である)。ここで仮に，(現実世界の)作者の虚実戦略をめぐる「意図と決断」(大浦1996:p. 251)を想定しても，やはり二重三重の曖昧さが浮上してくるはずだ。虚実の曖昧さを語る(発語内)意図は，経験的に確定できる現実だろうか。こうした問いに隣接する一人称小説「握手」は，メタフィクション的志向[6]にも開かれたテクストとして，理論的アポリアの所在を指し示すものと言える。そこでは，物語言説に対する読者フレームの二項対立もまた問いなおされることになるだろう。

4.2.　「字のないはがき」

「字のないはがき」では，語り手の「私」が作中で「向田邦子殿」と明示される。自伝契約論に拠らずとも(ルジュンヌ1993:p. 32)，固有名の一致は，現実の作者と作中人物(語り手)を同一化する条件として最有力のものと言える。随筆に対するジャンル意識の如何にかかわらず，「字のないはがき」の一人称存在を分節化するには，相当な目的性と操作概念が必要となってこよう。

ところで沢木(1981:p. 272)は，向田の随筆集『父の詫び状』に寄せた文章で，「その細部を真に味読するに充分な同時代的体験をもっていない私にとって，『父の詫び状』は，「生活人の昭和史」である前に，まず「精妙にして鮮やか」な短篇集として存在する」と述べ，向田「エッセイ」の「小説」的特質を解説している。そこでは，作者の「記憶」が諸挿話の核にあるとしたうえで，遠い過去でも現在に「生き生きと」表現できるのは，「記憶している過去をそのまま無造作に並べているわけではな」く，「ある主題に沿って記憶を読み直し，それを提出している」からだと指摘する(沢木1981:p. 275)。この点は，「字のないはがき」についてもそのまま当てはまるだろう。それゆえ，たとえば指導書における桃原(2006:p. 119)の解説も，テクストの時間構造と表現の変化をめぐって，小説のそれと変わるところない分析を展開している。敷衍すれば，向田の随筆テクストにおける「私」は，物語的自己同一性の形成とともに，その現実性を獲得すると言える。実のところ，語られたものの虚実や文学ジャンルの同定には，相当な困難が伴うはずだ。

採録している二つの教科書は，ともに「作者」・「筆者」といった表記を避け，鍵括弧つきの「私」・「わたし」を用いて作品に言及している。その徹底の含意するところはさ

まざまに推測できるが，こうした操作によって，遠い過去を回想する際の正確さ[7]も，劇化要素の追補を示唆する当事者の証言[8]も，オブセッションのごとく反復される「父」語りの徴候性――物語的自己同一性解釈の争点となろう――も，ひとまず括弧に入れることが可能となる。作品を解釈するにあたり，ジャンル規定に従って主語を「作者向田邦子」にすると，語られたものの事実性に問いが生じ，虚構的側面を不必要に浮かび上がらせてしまうかもしれない。随筆テクストおよびその語り手から，ときに現実の作者をそれとなく遠ざけること。このことは，事実的物語言説を安定的に(非‐虚構として)発信‐受容するために必要となる，潜在的かつ逆説的な曖昧さの存在を示唆していよう。「一定の虚構性」(下橋2001:p. 169)を認めうる随筆教材「字のないはがき」の隣には，諸々の禁じられた問いが横たわっている。「登場人物の行動や言葉から人物像を明らかにし，そのとらえ方を深めていく力をつけることのできる作品であると同時に，筆者の並々ならぬ筆力を味わい，随筆を読む楽しさも実感できる作品」(甲斐2010:p. 66)といった多面的な教材評価は，危ういジャンル規定のうえに成立しているものと言えよう。

4.3. 虚構「について」語ること

一人称(回想体)言説が抱え込む曖昧さは，ときに学習者を混乱させるだろう。一人称存在および物語内容の虚実に対する感受，想定の相違から，学習者同士のコミュニケーションに，(ウィトゲンシュタイン‐クリプキ流の)厄介な齟齬が生じるかもしれない(クリプキ1983:pp. 11-107)。それは学習者の未熟を意味するのでなく，言説一般に存する必然的な問題性に由来している。藤森(2009:p. 293)は「文学的文章の読みを契機として行われる対話や話し合いは，文学的文章というテクストがもつ機能特性により，予測不可能事象を誘発しやすい」とするが[9]，テクストの虚実認知に触れる議論は，とりわけドラスティックな「予測不可能事象」を導き出す可能性がある。

虚構理論においては，虚構存在に関する現実世界の言表行為の位置づけも論点となる(清塚2009:pp. 197-244)。サール(2006:p. 117)は，フィクション上の存在に関する発言を現実世界の指示行為とみなし，虚構の発語行為から区別している。たとえば，「握手」の登場人物を虚構の存在と認識したうえで，その形象などをめぐって交わされる言語活動は，ひとまず通常の発語行為とするほかないように見える。これに付随して，虚構世界の理解をめぐる真偽判断といった難題も浮上してこよう。ただしローティ(1985:pp. 276-281)が批判するように，虚構的言説も虚構に関する発言も，虚構テクストを成立せしめる慣習(言語ゲーム)に依拠している以上，両者の論理的区別はそれほど明確なものでない。また清塚(2009:p. 74)は，「ある作品がフィクションであるかどうかの識別は，真偽の値の確認に先立っている」とする。つまるところ，言説としてのテクストとそれに関する言説を，虚実のレベルで区分けするのは難しく，またとりわけ一人称回想体言説に関して発言する際には，テクストの虚実判断といった(曖昧な)潜在条件に遡及せざるをえないことも多々あるだろう。

「研究言説」の位置づけを図るなかで，石川(2010:p. 88)は，「作品」とは「読むという

行為，すなわち記述行為のその時に，行為論的に，過程的に産出されてしまう記述の痕跡」であり，「作品と作品への記述行為とは，それぞれ別のことがらではありえない」と述べる。この極論に倣えば，物語言説に関する発言は，作品世界の創出に関与する(二次的)発語行為の側面を持つことになる。たとえば，「字のないはがき」の内容を事実の忠実な再現と把握する一方，作品の表象について語る行為が，その物語性を意図せず構成，拡張している可能性もある。虚構的／事実的物語言説としての文学作品，ここでは特に一人称小説，体験回想型随筆を教材とする言語活動とは，いかなる特徴を帯びるものだろうか。

授業で作品世界について語る言説も，現実／虚構の素朴な二分法には区分できない曖昧さを含む。また，解釈の言説には，たとえば読書行為の回想(ジャンル認知の自覚化を含む)というファクターが加わるため，一人称の小説言説と同様(三谷1996:pp. 30-31)に，メタフィクション化(‘解釈する自分の行為を解釈する自分…’)の傾向が生じる可能性もある(中村1994:pp. 126-151)。そこでひとまず焦点は，一人称小説，体験回想型随筆ともに，学習者(同士)の語りにおける物語生成のあり方へと据えられよう。ナラトロジーを基盤とする文学の授業を構想した松本(2006:p. 41)は，「文学テクストをめぐる読みの交流という学習が行われるとき，その学習過程は社会学的な方法による分析の対象をなす〈語り〉の場を形成する。そして，そこでそのようにして構築されたコミュニケーション過程は，それ自体テクスト言語学的・社会学的なアプローチによる教育研究の対象として位置づけられる。」とする。そうした「〈語り〉の場」での「コミュニケーション過程」に，テクスト－受容者(たち)の相互作用による物語言説が生起する。そのなかでは，虚実をめぐる学習者のフレーム選択が，行為遂行的かつ顛倒的に提示・認識されることもあるはずだ。

ただし，(特に一人称回想体言説をめぐる)虚実の決定は，テクスト解釈のコミュニケーションにあって，過度に基底的な行為になるとも言える。それゆえ，言説ジャンルなどの「メタ・コミュニケーション的了解」(西村1993:p. 37)に関する遡及は，ほかと質的に異なるクリティカルな言表行為となりうる。それはいわば，虚構性をめぐるテクストの曖昧さが，一挙に縮減される瞬間なのだ。この縮減に関与する要素は極めて多様かつ個別的であり，そこに統一理論は成立しないと思われる。ゆえに，このとき学習者が思い描く作者側の(虚実)意図も，条件次第では(エーコ2011:pp. 101-103)，物語言説の一構成要素として有意味になるかもしれない。なお，随筆教材の学習目的である筆者の感性や世界観の受容は，重層的に決定された物語的自己同一性の強度を基盤としている。その強度はさまざまであるゆえ，ジャンル規範にこだわらず，テクスト個別の学習内容を考えていく必要が出てこよう。

5．おわりに

とはいえ国語教育では，〈虚構理性批判〉とでも言うべき立場をひとまず堅持する必要があると思う。その意味でも，作品解釈の言表行為段階で，虚構／現実の枠組みはときに有効な操作概念となるはずだ。そして，言語活動における物語生成といったより包括的な

視座から，学習者(同士)の発語行為を評価していくべきと考える。

ところでコンパニョン(2007:p. 22)は，文学をめぐる理論と常識の必然的対立を検証するにあたって，「理論と常識の二者択一，すべてか無かという威圧的な二者択一には抵抗することになる」，なぜなら「真実はつねに両者のあいだにあるから」だとしている。研究でもなく日常でもない国語科授業の営為こそ，この「あいだ」に生成するものではないだろうか。

文学作品を教材とする授業研究は，理論と現実に引き裂かれた文学研究と，確認してきたような地平で刺激的に交叉するものと思われる。虚構理論ひとつとっても，文学理論を教材研究へ導入，応用するだけでは，双方にとって生産的とは言えまい。「教育研究の対象」たる授業の言語活動は，文学(理論)研究の現状においても，第一義的な対象としてあるはずなのだ。いまや，授業という行為態の渦中に，文学の(曖昧な)「真実」が出来する瞬間を見ていくべきだろう。両者の協同が求められるゆえんである。

注

[1] また，一般的に随筆教材は「文学的文章」へ分類されるが，中西(1976:pp. 254-256)などが指摘するように，「説明的文章」との区別が判然としないのは明らかである。

[2] 他方で，「随筆における読みの過程では，(…)随筆は心に浮かんだこと，見聞きしたことを書いているのであるから，どの部分が心理・心情の部分であるのか，どこの部分が見たことなのか，あるいは聞いたことであるのかを区別し，区別したところどうしの関係はどうなっているのかを考えたり味わったりして読まなければならないであろう。」(須田1984:p. 44)といった指導論も提示された。ここから一人称作品のナラトロジー分析までは，ほんの一歩と言えよう。

[3] 高等学校の随筆教材について論じた松本(1991)は，「たとえ虚構があったとしても真実として読み手は受け止めねばならないという約束」が随筆作品にあることを指摘している。

[4] 中村(1994:p. 113)は，「ごっこ遊び」理論を批判的に検討するなかで，「むしろ遊びと非-遊びとの境界線が曖昧であり，はっきり言って不明であるからこそ，虚構は現実以上の衝撃力を発揮することができるのではないだろうか」と述べている。

[5] 渥美(2004)は，連作執筆期における作者の個人的事情と，単行本『ナイン』の構成・内容を関連づけ，小説「握手」の意義を探っている。

[6] 詳述は避けるが，多分にメタフィクション的趣向を持つ作品「会話」(『ナイン』所収)には，小説と物語性，および物語的自己同一性をめぐる話題が散りばめられている。

[7] たとえば，「三十二年前」に飲んだ「ツルチック」の記憶をたどる文章では，「(「ツルチック」のことを人に尋ねる…引用者注)その度に，三十二年前の記憶を繰り返す破目になったが，話す度に少しずつ潤色していることに気がついた。思い出に加筆修正するほど勿体ないことはない。」(「ツルチック」，向田1982:pp. 56-57)と記す。

[8] 妹向田和子(2002:p. 152)は次のように記している。「私がうちに帰ってきた時，父が泣

いたということは覚えていない。みんなが温かく出迎えてくれたことは覚えているが，父の涙はなぜか記憶にない。(…)／エッセイを読み終えて，同じことを覚えていても，姉は感じ方がずいぶん深いのだなと，涙がとまらなかった。」

[9] 藤森(2009:p. 293)は，「予測不可能事象」を「教育実践場面において，教師や学習者の予期・予想・期待等の範囲を超えて生起した事実のうち，教師や学習者に葛藤をもたらし，教材解釈や授業展開のあり方等に対する省察や見直しを促す事象」と定義する。

文　献

・青嶋康文(2001)「喪失と継承―井上ひさし『握手』を読む」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力中学校編3年』, 教育出版, pp. 111-128)

・渥美秀夫(2004)「井上ひさし『ナイン』の中の「ナイン」と「握手」」(『愛媛国文と教育』〔37〕)

・安藤宏(2008)「一人称の近代」(『文学』〔9-5〕)

・イーザー, W. (2005)『行為としての読書』(轡田収訳, 岩波書店)

・石川則夫(2010)『文学言語の探求―記述行為論序説―』(笠間書院)

・井上ひさし(1990)『ナイン』(講談社)

・井上優(2008)「「透明な脳」と「柔らかい心臓」―寺田寅彦『亮の追憶』・ゾンビ・外在主義―」(『文学』〔9-5〕)

・浮橋康彦「随筆教材」(1991)(国語教育研究所編『国語教育研究大辞典普及版』, 明治図書, pp. 537-538)

・エーコ, U. (2011)『物語における読者［新版］』(篠原資明訳, 青土社)

・遠藤健一(1996)「物語論の臨界―視点・焦点化・フィルター―」(三谷邦明編『近代小説の〈語り〉と〈言説〉　双書〈物語学を拓く〉2』, 有精堂, pp. 239-280)

・大浦康介(1996)「フィクション」(同編『文学をいかに語るか　方法論とトポス』, 新曜社, pp. 240-269)

・オースティン, J. L. (1978)『言語と行為』(坂本百大訳, 大修館書店)

・大田勝司(2001)「随筆・随想」(大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』, 明治図書, p. 138)

・織田保夫(2001a)「『握手』の構造」(前掲『文学の力×教材の力中学校編3年』, pp. 96-110)

――(2001b)「『握手』の読みと豊かな教育」(前掲『文学の力×教材の力中学校編3年』, pp. 126-128)

・甲斐利恵子(2010)「「字のないはがき(向田邦子)の授業実践史」(田中宏幸・坂口京子編『文学の授業づくりハンドブック第4巻―授業実践史をふまえて―中・高等学校編』, 溪水社, pp. 62-77)

・清塚邦彦(2009)『フィクションの哲学』(勁草書房)

・グッドマン, N. (2008)『世界制作の方法』(菅野盾樹訳, 筑摩書房)

・クリプキ, S. A. (1983)『ウィトゲンシュタインのパラドックス—規則・私的言語・他人の心—』(黒崎宏訳, 産業図書)
・コンパニョン, A. (2007)『文学をめぐる理論と常識』(中地義和・吉川一義訳, 岩波書店)
・サール, J. R. (2006)『表現と意味—言語行為論研究』(山田友幸監訳, 誠信書房)
・沢木耕太郎「解説」(1981)(向田邦子『父の詫び状』, 文藝春秋, pp. 269-281)
・下橋邦彦(2001)「作品構造の詳細な検討に敬服」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力中学校編2年』, 教育出版, pp. 167-169)
・ジュネット, G. (1985)『物語のディスクール』(花輪光・和泉涼一訳, 水声社)
——(2001)『スイユ』(和泉涼一訳, 水声社)
——(2004)『フィクションとディクション』(和泉涼一・尾河直哉訳, 水声社)
・須田実(1984)「三　随筆・紀行教材の特質と指導」(飛田多喜雄・小林一仁編『最新中学校国語科指導法講座5　理解(2)随筆・紀行の指導』, 明治図書, pp. 35-44)
・高野保夫「随筆」(2001)(日本国語教育学会編『国語教育辞典』, 朝倉書店, p. 239)
・田口紀子(1996)「ナラトロジー」(前掲『文学をいかに語るか　方法論とトポス』, 新曜社, pp. 69-90)
・デリダ, J. (2002)『有限責任会社』(高橋哲哉ほか訳, 法政大学出版局)
・中西昇(1976)「解説」(倉沢栄吉・中西昇編『国語の教材研究3』, 国土社, pp. 254-285)
・中村三春(1994)『フィクションの機構』(ひつじ書房)
・西村清和(1993)『フィクションの美学』(勁草書房)
・野口武彦(1980)『日本語の世界13　小説の日本語』(中央公論社)
・野家啓一(2005)『物語の哲学』(岩波書店)
・橋浦兵一(1991)「随筆」(国語教育研究所編『国語教育研究大辞典普及版』, 明治図書, pp. 534-536)
・ハンブルガー, K. (1986)『文学の論理　第3版』(植和田光晴訳, 松籟社)
・藤森裕治(2009)『国語科授業研究の深層—予測不可能事象と授業システム—』(東洋館出版社)
・松本修(1991)「随筆教材の読み方」(『読書科学』〔35-2〕)
——(2006)『文学の読みと交流のナラトロジー』(東洋館出版社)
・三浦俊彦(1995)『虚構世界の存在論』(勁草書房)
・三谷邦明(1996)「近代小説の〈語り〉と〈言説〉—三人称と一人称小説の位相あるいは『高野聖』の言説分析—」(前掲『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』, pp. 7-52)
・光村図書出版(2006)「握手」(『中学校国語　学習指導書3上』, pp. 40-69)
・向田和子(2002)『向田邦子の青春　写真とエッセイで綴る姉の素顔』(文藝春秋)
・向田邦子(1981)『父の詫び状』(文藝春秋)
——(1982)『眠る盃』(講談社)
・桃原千英子(2006)「字のない葉書　向田邦子」(『中学校国語1　教師用指導書　教材研

究編』, 学校図書, pp. 115-132)
・ライアン, M. L. (2006)『可能世界・人工知能・物語理論』(岩松正洋訳, 水声社)
・リクール, P. (2004)『時間と物語Ⅲ　物語られる時間』(久米博訳, 新曜社, 新装版)
・ルジュンヌ, P. (1993)『自伝契約』(花輪光監訳, 水声社)
・ローティ, R. (1985)『哲学の脱構築　プラグマティズムの帰結』(室井尚ほか訳, 御茶の水書房)

※本研究は科研費（23520219）の助成を受けたものである。

(2011年11月30日　受付)
(2012年２月24日　受理)